この体のために人の心を読む技術を習得しました

1975 年、静岡大学人文学部法経学科法学専攻の学生だった私の研究テーマである「身体障害者の教育と労働」を実践すべく、有限会社の設 立に参画した。それ故、知人の重度脳性麻痺で身体障害者を講師として採用し、経営が成り立たせることを実証しました。当時毎月新聞を発行し、週 1 回の 50 分の授業に 500 円の授業料で受 講生を募り、彼とは、その収益の 7 割を講師料として払うという雇用契約を結びました。折り込み料節約 のため、今で言う「ポスティング」をやりました。

その第 1 回目の授業は、今でも覚えています。テーマは、「身体障害者の視点」。彼が車椅子で街中に出た時の思いを語ったのです。その最後の質疑応答で、受講生の小学 1 年生の女の子がこんな質問をしたのです。「そんな恰好（車椅子）で恥ずかしくないですか？」突然の質問に隣の母親はびっくり、おののくばかりでした。しかし、講師の彼は、「いいえ、お嬢さん。私はこの体のために、人の心を読む技術を習得しました。実は、質問する前のあなたの表情から、あなたの質問内容が分かりました。私達、身体障害者は生まれつき、周りの人が自分をどう見ているか、どう思っているかということに、異常な程過敏になっており、それなりに私達を見る人の気持ちを読んじゃうんですね。当然あなたにはそうした能力がありませんから、そうした質問をしたんですね。いいんですよ、あなたは決して悪くありません。率直な疑問だったでしょう。これが私の答え、分かりましたか？」

答えた彼と質問した彼女に対して、拍手が湧きました。

その彼とは、この授業の前の年、同じく脳性麻痺で軽い言語障害のある友人の紹介で知り合いました。妙にウマが合うって言うか、不思議な位に自然に、それも素 直な気持ちで付き合うことができる彼でした。酒を飲み、よく夜遅くまで、特に身体障碍者の教育や労働について議論をしました。 かと思えば、私が借りていたアパートの大家の息子さんまで巻き込んで、よく朝方まで麻雀をやりました。

そうそう！その年の暮れ、例のごとく夕方一緒に酒を飲んでいたら、彼が突然スキー（って言うか、そりだったんですが）をやりたいと言う。久しぶりだから俺もやりたいからと、その場で知り合った長野県飯山の民宿のおばさんに電話し、夜行で一緒に出掛けました。静岡駅に電話し、車いすの知人同行の手配をする。静岡駅に着くと、「大変でしょうから、お使い下さいよ。」って言って、荷物用（!?）エレベーターまで案内して下さった静岡駅の駅員さん。その駅員さんは乗り換えの甲府駅に連絡してくれ、車いす対応の手配もしてくれました。甲府駅で私一人で彼の乗った車いすを持ち上げようとしたら、「手伝いますよ。」って声を掛けてくれた数人の乗客の皆さん。電車が動き出したら、早速床に新聞紙を敷き、彼を車いすから引きずり下ろし、手伝ってくれた乗客の皆さんと飲めや歌えの大宴会。実に楽しい夜行の旅。夜中の 11 時過ぎ、民宿のおばさんが駅まで迎えに来て、酔っぱらった彼を一緒に抱え、部屋まで運んでくれました。そして、翌朝のそり遊びでは、「僕が引くよ ー！」って言って彼のそりを引いてくれた地元・飯山の小学生達。

　あの時はホント、人の優しさを感じさせてくれ、人間っていいな！と、しみじみ思いました。